

『教学論集』と能海寛

タイトル	『教学論集』と能海寛
著者名	高本康子
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 13 号
ページ	1－11
発行年	2008.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年
5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東
谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶
応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思
を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教
徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山に
よる体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史
を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小
屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として
釈迦直伝の大藏経の經典を求め英訳經典世に出
す目的で当時鎖国中であったチベットへ求道の
ため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉
大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓
を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心経」
西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書
として永遠に伝う。

『教学論集』と能海寛

東北大学大学院国際文化研究科 高 本 康 子

1.はじめに

最新のチベット情報として、能海は、どのようなものに接していたのか、また、どのような情報によって、彼のチベット知識は形成されていったのだろうか。1887（明治 20）年以降については、『反省会雑誌』という好材料があるが、それ以前の彼について、特に『世界に於ける仏教徒』へと、チベットに関する彼の知識がどのように集成されていったかを明らかにする資料の一つが、『教学論集』であるといえる。

『反省会雑誌』以前に彼が接触した資料としては、当時中等学校の教科書に使用され、一般にも広く読まれた内田正雄『輿地史略』⁽¹⁾と、東本願寺の大陸布教の参考書として、小栗栖香頂（1831-1905）が中国語資料と北京と五台山での見聞をもとにして著した『喇嘛教沿革』（1876 年）がある。前者は能海が、当時の彼の仏教についての見解を総括した著作と言える『世界に於ける仏教徒』（哲学書院、1893 年）に、チベット事情の一部として引用されている。後者については、その書名こそ言及されていないが、やはり『世界に於ける仏教徒』に、小栗栖の著述に対する言及があり（10 頁）、また同じ浄土真宗大谷派の僧侶として、能海は、小栗栖の学僧としての名声を十分に認識していたと思われる。従って、この二つの文献が、能海のチベット知識の形成に大きくかかわっていたであろうことは、当然考えられる。しかし、当時の若い仏教者のひとりとしての彼を取り巻く知的環境を、「チベット」に限定されないより広い範囲で考えようとする場合、それが可能となる資料の一つが、『教学論集』であるといえる。

2.『教学論集』について

1885（明治 18）年 10 月 29 日付の『時事新報』社説「士人処世論続」において福沢諭吉は、「三十年前」と違って、現在では、運輸、通信の手段が飛躍的に改善されたことを述べている。この記事によれば、「耳目の区域を広くするの方便」が、地方においても十分に整備され、「郵便を用れば日本国中十日以内に書状の達せざる所なし、電信あれば即日世界の消息を聞く」ようになった。更に、地方在住を、「時勢に後れて迂闊に陥る」原因とするのは、まさに「時勢」を知らない発言であるとした。この記事で注目すべきなのは、「時勢」の動向に強い関心を持つ人々にとっての、情報媒体の重要性が示されていることである。

情報媒体の中でも、雑誌については、例えば、1888（明治 21）年 7 月 5 日付の『教学論集』第 55 編には、「流行の交代」と題する記事がある。ここでは、物事の流行における、その勢いの激しさと、その移り変わりの早さについて述べ、「近来社会に現出したる者ハ雑誌なるか」（31 頁）と付け加えられている。この記述にも、当時雑誌が多数出版され、それを読むことが、ここに所謂「流行」と表現できるほど、人々の間に広まっていたことがうかがわれる。情報獲得手段としての雑誌への関心の高さは、ここからも十分推測しうる。

『教学論集』は、1883（明治 16）年 10 月に創刊され、1892（明治 25）年 3 月まで続いた⁽²⁾、仏教に関する事柄を内容とする雑誌である。月一回発行で、毎号およそ 35 頁ほど

の構成であった。第1編から第62編まで（1883年10月-1889年2月）は、東京の無外書房から刊行されているが、1889（明治22）年3月から1890（明治23）年10月まで空白期間があり、その後1890（明治23）年11月から第63編が、同じく東京の教学会から刊行された。この間、刊行がとぎれた経緯は不明である。但し、再開第一号に当たる第63編（1890年11月15日）巻頭には、再開を慫慂する声が多かったため、「教学会」という組織を作って会友を募り、改めて『教学論集』を発行する、と述べられている。

再開されて1年余り経った当時の新聞に、「当初は宗派を越えた、独立した雑誌であったが、現在においては浄土真宗の支援をうけているものと思われる」等と報道されている^③が、「支援」に関するこのような変化は、中絶と再開に伴う何らかの事情によるものと推察される。この中絶の前後においては、無外書房版では巻頭に置かれていた「緒言」が、教学会版では巻末に移され、「教学会緒言」と名称が変更されるなど、形式にも若干の変化があった。但し「発行人兼編輯人」が水溪智応、「印刷人」が山本貫通であることは、再開以後も変わらない。

誌上には、明治10年代までに活躍した指導者として名高い僧侶たち、すなわち、「八宗の泰斗」と尊称された福田行誠（1809-1888）^④、政教分離運動や西本願寺の改革などの先頭に立った島地黙雷（1838-1911）^⑤、東京帝国大学印度哲学講座初の「仏書講読師」として教鞭をとり、自然科学と関連づけて仏教の教義を検証した原坦山（1819-1892）^⑥等から、明治20年代以降の著名な仏教活動家、すなわち、還俗した仏教者として宗派を越えた自由な立場から啓蒙活動を広く行った大内青巒（1845-1918）^⑦、「宗派仏教から護国愛理の仏教への展開を理論的に体系化」した井上円了（1858-1919）^⑧、陸軍中將を経て近衛都督となり、元老院に入った鳥尾得庵（1847-1905）^⑨など、仏教改革を標榜する著名な論者が名を連ねている。

明治仏教史編纂所『仏教関係新聞雑誌目録』（明治仏教史編纂所、1934年）によれば、1876（明治9）年までに創刊が確認できる仏教新聞・雑誌は29点、明治10年代は57点にのぼる。明治時代の新聞、雑誌について詳細な研究をした西田長寿は、『教学論集』について、「明治一三、四年に創刊された各宗各派の機関は別として、明治一七年十一月創刊の『教学論集』は、当時代表的の仏教学者の論稿が多いという点で、とくに注目に値する雑誌である」（西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』増補版、日本歴史新書、至文堂、1966年、139-140頁）と述べている^⑩。明治の新聞・雑誌について、宗教雑誌に限らず、広範な研究を行った西田が、他に数多くある仏教系メディアの中から特に『教学論集』を取り上げ、「注目に値する」としていることは、この雑誌が持った重要度の一端を示すものであると言えるだろう。

では、『教学論集』と能海は、どのような関係にあるのだろうか。現在、能海の遺品として金城町に残されている雑誌には、隅田正三氏のご教示によれば、以下の7点がある。すなわち、『佛教』第128号（佛教学会、1897年7月15日発行）、『教学論集』第15編（無外書房、1885年3月5日発行）、同第17編（同年5月5日発行）、同第18編（同年6月5日発行）、『日本之教学』（教学書院、1887年9月30日発行）、『法之雨』第110編（1897年2月20日発行）、『国民之友』第42号（民友社、1889年2月22日発行）である。

注目すべきなのは、『教学論集』がこの中で唯一、1885（明治18）年9月16日広島教校に入学する以前、すなわち、金城時代のものであることである。彼は、京都や東京にお

いて、いわば全国レベルの仏教界の動きを直接見聞きすることになるが、彼の生涯においてその前後をちょうど含めた時期を通観することができるのが『教学論集』であると言える。

3.『教学論集』に見るチベット情報

3.1.チベット仏教（喇嘛教）事情

チベットはまず、仏教の教域が説明される場合に、地名の一つとして言及される。例えば、島地黙雷「護法布教何レカ今日ニ切実ナル」（『教学論集』第28編、1886年4月5日、18-23頁）には、「古ノ護法ハ所謂實際ノ護法即チ布教ニシテ印度ヨリ緬甸暹羅安南西藏蒙古支那朝鮮ヲ経テ日本ニ流布セシメ大ニ開導利用ノ功ヲ奏セシメタリ」（19頁）とある。

その他、北澤正誠「高岳親王求仏法至羅越国薨於流沙河上考」（『教学論集』第14編、1885年2月5日、8-13頁）の、「按スルニ魏源開国図志西藏ノ雅魯藏布江（洋名ブラマプーツラ）亦大金沙江ノ名アリ」（12頁）、石川貞一「観音考」（『教学論集』第20編、1885年8月5日、14-15頁）の、「又梵書ニ言ク普陀山ノ西ニアリ（中略）一ハ土伯特ニ在リ今番名布塔拉山ナリ亦観音現身ノ地ト云フ」（15頁）というように、ヤルツァンポやポタラなどが、河名、山名として挙げられている。このように地名として言及されるに過ぎない場合、これらには特に説明は付されていない。

チベット仏教について、通じて言われるのは、例えば「^{チベット}西藏刊行ノ仏典「カンジヤル」及ビ「タンジヤル」ハ三百二十五卷ナリー卷ノ重量ハ北京刻ニテ四磅乃至五磅ナリ」（馬博士「宗教学入門」『教学論集』第69編、1891年5月15日、11頁）というように、チベットに残された仏典がいかに膨大なものであるかということである。注目すべきは、「現今尚「チベット」及ビ「セーロン」ニ於ル諸寺院ノ書庫中ニ積堆シテ存シ」（石川舜台「仏教論評」『教学論集』第20編、1885年8月5日）というように、チベットとスリランカの二箇所が、仏典が多く残された地域として特に名指しされていることである。

この後、日本の仏教者たちの関心が、欧米の影響を受けて、シャカの教えにより近い仏教原典の調査研究に向いていき、その結果、調査研究の対象地域として、アジア全土の中から、チベットとスリランカの二箇所に焦点が合わせられていった⁽¹¹⁾。事実スリランカへは、仏教僧が何人も留学している⁽¹²⁾。以上に見た『教学論集』の記述には、そのような動きの、いわば前段を見ることができる。

3.2.チベット事情

『教学論集』誌上において見られるチベット情報に関して、注目されるべき点は以下の3点である。すなわち、①新しい情報、特に欧米人が得たチベット情報、例えば1846年にラサに入ったカトリック神父エヴァリスト・ユック（1813-1860）の体験などの情報が誌上で紹介されていること、②『喇嘛教沿革』を書き、当時チベット仏教について最も知識を持つ僧侶の一人と目されていた小栗栖香頂の、1875（明治8）年当時の情報が、再三読み直されていること、そして③チベットへのアクセスの必要性が、『反省会雑誌』や能海に先だって言及されていることである。

まず①の、チベットについての最新情報、特に欧米を淵源とする情報で、最も早い時期のものは、石川舜台「仏教論評」（『教学論集』第12編、1884年12月5日、24-28頁）

の、仏教についての記述にある、「又「メダルフ」氏ハ此宗教ノ本尊トシテ天女ト称スル女神手ニ十字ヲ執リ小児ヲ抱キタル像ヲ図画シ此神前ニ罪ヲ懺悔スト云ヘリ 評女神恐クハ刺麻教中ノ諸天ナルヘシ今記シ得ズ仏教ノ本尊ト云フハ妄モ亦甚シ」(25 頁) という部分である。

しかし、まとまったものとして、注目すべきなのは、1846 年にラサに入ったユックの情報である。ユックは、カトリックに属するラザロ派の神父であり、同じ神父のガペー(1808-1853)とともに中国、モンゴル、チベットを旅した。1850 年に出版された彼の名高い旅行記『韃靼・西藏・支那旅行記』(*Travels in Tartary, Thibet, and China, during the Years 1844-5-6*)⁽¹³⁾は、ラサを実見した欧米人の旅行記としては最初のものであった。

ユックの情報としてここで伝えられているのは A.キリスト教との類似点、B.ダライラマという「法皇」の存在、C.チベット人の信仰の篤さ、である。このうち、『喇嘛教沿革』や『輿地志略』になかった情報は、A.であり、例えば、「奏樂人經典ノ諷誦却魔摩頂式僧ノ孤独信仰ノ閑居断食拜礼式灌頂等ヲ記載シ総テ是等ヲ西教ニ類ス」、「仏教ノ法式ハ古昔最隔遠ナル支那国ヘ渡航セシ「子ストリヤン」耶蘇社ノ名ノ教式ヲ摸シ取リタル者トス」(以上、石川舜台「仏教論評」『教学論集』第 12 編、1884 年 12 月 5 日、25-26 頁) といった記述がある。この A.に属する記述の中には、「近來「ヒュク」氏並ニ「ガベット」氏等彼地ニ到テ親驗セシニ大ナル者ハ一寺ニシテ四千人ノ僧ヲ容ルヘシ此等ノ大建築ヲ見レハ仏教寺院ノ築造ハ西教ノ寺院ニ類スト雖モ其年代ハ遙ニ先ニシテ全ク西教ヨリ摸型セシニ非ルコト明ナリ却テ意フ「カトリック」教ニ用ル所ノ寺法鐘念珠帽等ハ仏教ニ基本セシニ非サルカト謂ヘリ」(同上、27 頁) というように、キリスト教と仏教の間の、歴史的な影響関係の存否に言及するものも見られる。

更に新しい情報としては、カルムイクのチベット仏教寺院についてのものがある。これは、能海の師として知られる南條文雄とともにオックスフォードに留学した笠原研寿⁽¹⁴⁾が伝えているものである(「笠原研寿手簡」『教学論集』第 10 編、1884 年 10 月 5 日、2-5 頁)。ここに挙げられる「スポティスウッド」は、イギリスの数学者ウィリアム・スポティスウッド(William Spottiswoode, 1825-1883) を指すと思われる。このスポティスウッドには、*A Tarantasse Journey through Eastern Russia in the Autumn of 1856* (London, Longman, 1857) という著作があり、これによれば、彼は、1856 年の 10 月から 11 月にかけて、ロシアを旅行した。スポティスウッドはこの著作の序文において、特にマックス・ミュラーの名を挙げ、その教示に感謝を述べていることから、何らかの形でミュラーを経て、スポティスウッドの情報が笠原に伝わり、この記事となった可能性が考えられる。

この著作の内容と、笠原の記事を照合すると、笠原の記述はほぼ、第十章の一部、仏教寺院を訪問する場面の要約となっていることがわかる(前掲 *A Tarantasse Journey through Eastern Russia in the Autumn of 1856*, 221-230 頁)。内容としては、以下の点に注目される。まず、本文には「仏寺」としか表現されないが、「魯国政府ハ「カルマク」人ヲシテ西藏ノラサニ於テ大ラマト交接スルコトヲ絶タシメシ後ハカスピヤン広原ノ「カルマク」族ノ長老中ヨリ此職ニ推選セラルコトナリシト云」、「勤行始マレリ和尚初ニ低声ヲ以テ「オムマニパドメカン(フーム歟)」ヲサモ殊勝ニ誦シタリシ」等という記述から、これがチベット仏教寺院であることが容易に推察される。

記事の大半を占めるのは、スポティスウッド一行の内の一人が、寺の僧侶を相手に行っ

た質疑応答を伝える記述である。これは、キリスト教徒が仏教についての疑問を質す、という形式がとられている。このような内容に紙数の半分が割かれ、詳細に伝えられたことには、当時の、キリスト教に対抗する意識が反映されているものと思われる。質問の内容は、万物の創造主の在否、人間の起原、悪魔、死後の世界（天国と地獄）、宗教的優劣（仏教、キリスト教、ヒンディー教、イスラム教）についてである⁽¹⁵⁾。

末尾の、論の要旨を総括する部分において、「此一仏寺ハ烏拉爾山ノ西南ニ当リ裏海ノ海浜ナル欧羅巴内部ノ仏寺ナリ」と述べられていることから、この記事ではこの仏教寺院での出来事が、ヨーロッパの仏教事情の一端と捉えられており、その中でも特に、キリスト教徒の仏教への接触の詳細に興味が持たれていたことが示されていると言える。

次に、②、すなわち小栗栖香頂の情報の再登場がある。小栗栖は1873（明治6）年から翌年にかけて中国に滞在し、北京や五台山においてチベット仏教の僧侶たちと接触をもった。ユックヤスポティスウッドの情報が紹介されたのが1884（明治17）年から1885（明治18）年にかけてであり、それに引き続いて、1885（明治18）年から1886（明治19）年にかけて、「明治八年」と明記された情報が読み直されているのである。

具体的には、龍泉寺本然、雍和宮活仏トンコル・フトクトという、彼が北京で親しく接した仏教僧への書簡と、北京で詠んだ漢詩が紹介されている。本然への書簡においては、インド行きの必要性、インドの仏教徒との連帯の必要性が説かれ、その中でチベット語の中にインドの文字が見られることに触れられている（小栗栖香頂「贈北京龍泉寺本然書 明治八年」『教学論集』第14編、1885年2月5日、13-17頁）。また、トンコル・フトクトに宛てた書簡においては、チベットの王統とチベット仏教史が簡略に述べられている（小栗栖香頂「贈北京僧頓潤爾呼図克図書」『教学論集』第32編、1886年8月5日、20-23頁）。しかしこれらはいずれも、『喇嘛教沿革』ですでに記述されている情報である。

更に、③、すなわちチベットへのアクセスの必要性を指摘した記述がある。これは、東京帝国大学で教鞭をとった哲学者、井上哲次郎（1855-1944）によるものである。彼には、「国家主義的な教育ならびに国体観に基づくキリスト教批判」（中村元、笠原一男、金岡秀友監修・編集『近代仏教』アジア仏教史日本編Ⅷ、佼成出版社、1972年、243頁）を行い、大きな論議を呼んだ⁽¹⁶⁾著作である『教育ト宗教ノ衝突』（1893年）があるが、『教学論集』の記事はそれ以前のものである。

井上は仏教徒が早急に取り組むべき問題として、仏教改革を挙げる。「耶蘇教の第一日本に適せぬ点は其十誡中先祖を崇拜せず忠孝の大倫を神に向てのみ有するが如き只管未来と天帝とを大切に現世を蔑視するが如き国家的觀念の乏しきが如き誠に我国体国俗には有害無益なり」というように、キリスト教は日本の「国体」には有害な宗教であり、仏教こそが日本の宗教としてふさわしいと述べるのである。しかし、現状の仏教では、「流伝の久き悪弊の染み付きたるとなきにあらざ」という状態であるため、「改良」が非常に必要とされる。したがってこの「改良」のために、「理哲新規の学説に考へ且語源伝流の由来を明かにし性格に歴史的批評的に講究して完全玲瓏たるに至らしむる」ことが、「今日の仏教徒たるもの当然の責任」とであると述べるのである（以上、井上哲次郎「歐洲に於ける梵語及仏教上の所見」『教学論集』第67編、1891年3月15日、13頁）。

この「改良」のための仏教研究を完遂するには、言語の研究、特にサンスクリット語、パーリ語、チベット語の研究が不可欠であるとする⁽¹⁷⁾。そして現在において仏教研究の持

つ意義を、A.教義についての諸問題を明らかにする、B.「科学研究」に資する、C.チベットにおいて現在流布している仏教について明らかになる部分がある、の3点に整理している。注目されるのは、仏教が流布されているアジア諸地域の中で、特にチベットが挙げられている点である。ここにおいて、能海の『世界に於ける仏教徒』に先立って、チベットという地域のもつ重要性が、「仏教研究」という視点から見直されて来ているのが見て取れる。

4.その他の注目点

その他『教学論集』の内容のうち、能海との関連において注目すべき情報としては、まず、反省会会員らが海外における仏教情報の重要な情報源の一つとした、神智学協会に関するものがある。神智学協会は、仏教活動を行っている海外の団体として、最も頻繁に日本の仏教徒と接触したものの一つと言える。この接触の様子は、双方の交流において重要な拠点の一つであった反省会⁽¹⁸⁾の機関誌『反省会雑誌』に見ることができる。しかし、『教学論集』においては、『反省会雑誌』創刊以前、すなわち1887(明治20)年8月以前の段階を見ることができるのである。

例えば、1886(明治19)年頃から会の名称や、会に関わる人名や書名が紹介されはじめる。例えば、神智学協会は、「^{ネオソフイコルツタイデー}神智学会社」(「笠原研寿手簡」『教学論集』第28編、1886年4月5日、8頁)、「^{ヒンドウ}霊智会」(「印度楞伽島巡遊紀行」『教学論集』第77編、1892年3月20日、8頁)等の表現で、言及されている。関係者の名前も、「米人「コロソル」オルコット」、「魯国ノ一婦人「マダム」ブラワツキ」(前掲「笠原研寿手簡」、8頁)、「英ニシ子ツト氏アリ」(赤松連城「仏教問答緒言」『教学論集』第29編、1886年5月5日、31頁)などが挙げられている。中でも最も頻繁に出現するのはオルコットの名で、「客年オルコット氏ノ英国倫敦ニ至ルヤ英人之ヲ基督教ノ保羅ニ比スト熱心ノ甚キ以テ想フベシ」(「雑録」『教学論集』第29編、1886年5月5日、31頁)というように、彼は仏教徒として、キリストの使徒パウロに比せられているとも報じられている。

また、オルコットの書簡と彼の著作『仏教問答』が熊本の水谷氏に送付され、赤松連城らの手を経て、今立吐醉が翻訳した経緯も詳しく報告されている(赤松連城「仏教問答緒言」『教学論集』第29編、1886年5月5日、31頁、榕陰道人「仏教ノ西漸」『教学論集』第30編、1886年6月5日、7-10頁)。シネットの著書 *Esoteric Buddhism* (1883年)にも言及がある(前掲「仏教ノ西漸」、8頁)。更にこの後、「ヲルコット氏曰く」(原坦山「社会思想ノ変遷」『教学論集』第39編、1887年3月5日、1頁)、「ヲルコット氏の所謂」(原坦山「印度哲学要領」『教学論集』第44編、1887年8月5日、2頁)等というように、オルコットの言葉が引用されることが多くなってくる。

しかしこの時期においては、人的交流はまだそれほど多くない。笠原は手紙の中で、「二十日早朝クレンブルグノ家ニ到ル此ハ海岸ニテコロソルヨリ七里計リアリ隣ニ一仏寺アリ其僧来リ話スオルコットヲ讃嘆スルコト無量ナリ少々狂気ノ由学問モ少々アル人ノ由」、「然レドモ生ハオルコットニ逢ハ子バナラヌコトモナク」(「笠原研寿手簡」『教学論集』第29編、1886年5月5日、6頁)と、いわばある程度の距離をおく態度を見せている。1887(明治20)年インドを訪れた南條文雄も、『教学論集』に旅行報告を載せ、その中でマドラスの「神智学会」に言及しているが、「仏教問答ヲ著ハセシオルコット氏実ニ其会長タリ

其友人クーパルオーリレー氏余カタメニ神智学校ノ趣意ヲ話シ且ツ同会ノ書籍ヲ送致スルコトヲ約セリ」(南條文雄「入竺日記抄録」『教学論集』第44編、1887年8月5日、28頁)と記述するのみである。

しかし、1890(明治23)年6月のスリランカでの見聞を内容とする小泉了諦の報告には、彼等日本の仏教者との交流が盛んに行われている様子がうかがえる(小泉了諦「印度楞伽島巡遊紀行」『教学論集』第74編、1891年12月15日、9-17頁)。例えば、スリランカに留学した7名⁽¹⁹⁾のうち、釈興然を除いた6人が、「オルコット氏の真智協会に在り」(「印度留学僧」『教学論集』第65編、1891年1月15日、30頁)に滞在していると伝えられている。彼自身も、行く先々で神智学協会関係者に歓待された⁽²⁰⁾。

能海は『世界に於ける仏教徒』において、オルコットやブラヴァツキーなど、神智学協会に関係する人物の名に触れる一方で、これらの人々の標榜する「仏教」をどのように扱うべきか、という疑問をも提示している。つまり、日本の仏教徒と神智学協会の接触は、1885(明治19)年から1886(明治20)年の断続的な通信の往来から、1888(明治22)年のオルコットとアーノルドの来日を劃期とする、頻繁な交流の実現を経て、能海の『世界に於ける仏教徒』に見られるように、その教義への懷疑へと進行していったのだと言える。『教学論集』には、神智学協会関係の情報の取り扱われ方のありようとその変化において、『反省会雑誌』の前段階を見ることができると言えよう。

次に、キリスト教との単純な対決姿勢を批判し、そこから転換して、比較宗教学へと志向していく過程がはっきりと見て取れる。例えば、ロンドン留学中に書かれた「手簡」において笠原研寿は、キリスト教の聖書を十分に研究し、なおかつそこに記述されている事象一つ一つの背景を、歴史学的、言語学的に調査分析し、立証した上でなければ、キリスト教に対する有効な批判は成り立たないとしている(「笠原研寿手簡 明治十二年一月英京倫敦ニ在テ書ス」『教学論集』第11編、1884年11月5日、7-8頁)。

更に、ヨーロッパにおけるキリスト教の頹勢と、仏教に対する関心の高まりが、対照的に報じられていくようになる。既に1888(明治21)年11月5日付の『教学論集』第59編巻末「海外宣教会々員募集広告」には、「彼欧米諸国ニ於ケル仏教弘伝ノ機運既ニ熟知セルコトハ昨年来通信上ニ得タル事実ノ報道ニテ充分之ヲ認メ得ルノミナラス現ニ仏教伝道師ノ派遣ヲ請テ止マサルニ至ル」という記述が見られるが、頻繁に記述されるようになるのは、やはり1891(明治24)年前後からである。例えば、「牛津^{オックスフォード}の大学図書館を初め其他の東洋学会に於て仏教の經典を研究するもの日に月に増加せり」(「教学」『教学論集』第69編、1891年5月15日、21頁)、「近頃パリ府には仏教を好むもの多くして新聞紙は競ふて仏教の記事を載せ仏教演説には聴衆群集するの有様にて(中略)近來パリ府の評判によれば府内に仏教を信ずるもの少くとも十五万人はあるべしと彼地の新聞は記せりととの報」(「雑報」『教学論集』第71編、1891年9月15日、31頁)等という報道である⁽²¹⁾。

既に1888(明治21)年11月5日付の『教学論集』第59編巻末「海外宣教会々員募集広告」には、「彼欧米諸国ニ於ケル仏教弘伝ノ機運既ニ熟知セルコトハ昨年来通信上ニ得タル事実ノ報道ニテ充分之ヲ認メ得ルノミナラス現ニ仏教伝道師ノ派遣ヲ請テ止マサルニ至ル」という記述が見られる。

また、後に能海が主張する「探検」へつながると考えられる、「布教」に関するものがある。『教学論集』第28編(1886年4月5日)所載の論文「護法布教何レカ今日ニ切実ナ

ル」で島地黙雷は、「護法」という語を分析し、「古ノ護法」は「護法即チ布教」であり、それによって仏教は、インドから始まり、チベットやベトナム、中国、日本にまで達する広大な教域を得たとする。しかし「近時」の仏教について彼は、「只固有ノ形勢ヲ維持セント欲スルノミニテ毫モ進趣ノ実用ヲナセシ者アラス海外諸州ニ宣教ノ志ナキハ鎖攘絶好ノ制度ニ養成セラレシノ所為トモ云ベシ」(19 頁)と批判する。従って、このように「護法」と「布教」に大きな差異がある場合、「寧ロ護法ノ言ニ換ユルニ布教ノ語ヲ以テセント云ヒシ者必シモ浮游ノ譏語ニ非サルヤ知ヌベシ」(20 頁)とする。

彼がこの議論の中で見ている、当時の「護法」に含まれる問題は、具体的には「破邪顕正」をめぐる言論を指すものであると思われる⁽²²⁾。彼は、この「破邪顕正」は、仏教者がすべきことではあるが、「真理ノ所在ヲ甄明ニシ事物ノ因果ニ通達セシ巨匠碩徳」にしてはじめて達成できるものであって、「奚ゾ黄口ノ沙弥啞羊ノ雛僧ガ一時讒謗非毀ニ髣髴セル口闔舌争ノ謂ナランヤ」(20-21 頁)と非難している。そして、「近ク自身ノ家族親縁ヨリ始メ懇到慨切之ヲ隣里郷党ニ及ホシ相率ヒ相伴ヒ漸次教域ヲ拡張」(22 頁)とし、「護法ノ言ニ従ヘバ啻ニ退縮ニ止ルノミナラス大ニ抗拒争闘ノ端ヲ開キ災害ヲ世間ニ来ス渺々ナラス若布教ノ言ニ従フトキハ啻ニ進趣ニ傾クノミナラス實際ニ教諭開導シテ確乎不拔ノ深信ヲ生セシメ」(23 頁)と論を結んでいる。

その後、キリスト教との対決姿勢は、「破邪顕正」から、「比較宗教学」へと変化する。

「比較宗教学」は、能海の『世界に於ける仏教徒』において度々言及されるキーワードであり、特に第三章「宗教学上ノ仏教」においては、宗教学研究に欠かせない7つの視点の1つとして、「比較宗教学」が挙げられている(『世界に於ける仏教徒』、17-20 頁)。すでに『教学論集』第57編(1888年9月5日)に、「比較宗教学の必要」と題する記事があり、「仏教者か仏教の真価を世に知らしめ之に帰服せしめんとするには仏教と各宗教との異同を比較し其起源發達を比し其長短真偽を比較すへし是比較宗教学の必用なる所以なり」(19 頁)とあり、英文、仏文、独文の参考書が15点紹介されている(20-21 頁)。

教学会に発行所が代わった第63編(1890年11月号)からは、社説に相当すると思われる巻頭の「会説」において、「比較宗教学ノ必要及其眼目」が述べられている。またこの号の「緒言」において、「教学論集は苟も教学に関する事は、宗教の何たるを問はず、古今に論なく、東西洋の別なく、天文地理、及び人為考究の事物、悉く掲載し、以て演説、説教、及び著者の材料に供し、併せて竊に他日比較宗教学の階梯を作らんことを期せり」(65編巻頭)と、「比較宗教学」の研鑽が『教学論集』の大きな目的の一つとして掲げられるようになり⁽²³⁾、以降、誌上には、「比較宗教学」関係の記事が多く掲載された。第64編巻頭広告には、「第六拾参編(十一月十五日再刊)より我が国に於て未だ興起せざる「比較宗教学」研究の針路に向て出發せり、故に一段の進歩をなし、面目を新にす」と大きく掲げられている。例えば、『教学論集』第65編(1891年1月15日)のトップ記事、「比較宗教学入門の書目籍」は、「比較宗教学」の参考書として、どのようなものを読めばいいのかという、読者の求めに応えたものである。ここには南條文雄の回答として、2種の書籍が挙げられている⁽²⁴⁾。この号の雑報欄には、当時の帝国大学のカリキュラムに、「比較宗教及東洋哲学」が正式に組み込まれたことを報ずる記事もある(30 頁)。更に、再開から最終号まで毎編、「宗教学入門」と題した、マックス・ミュラーによる比較宗教学の講義の翻訳を、全15回にわたって掲載した。

池田英俊編『論集日本仏教史』（第八巻、雄山閣出版、1987年）は、仏教革新運動の潮流を、「文明の宗教と目されるキリスト教と厳しく対立」した「二十年代初頭の仏教国粹主義運動」と、「宗教への歴史的研究や教理への自由討議によって、その史的見地より事実を追究し、それを実証しようとする」、「二十七・八年当時の近代仏教胎動期の思想運動」とに二分している（35頁）。以上に見てきた『教学論集』の内容には、前者から後者へと移り変わっていく過程が、明瞭に現れていると言えるだろう。

5. おわりに

能海は『世界に於ける仏教徒』において、そのチベット情報の大部分を『輿地志略』から引用している。すでに1876（明治9）年に『喇嘛教沿革』があり、著者小栗栖は能海の属する浄土真宗大谷派においてその学識で名高い僧侶であった。この『喇嘛教沿革』は、大正初めまで、信頼しうるチベット仏教の概説書とされていた。にもかかわらず、能海は『輿地志略』を使用している。『教学論集』の内容は、いわば、能海が『喇嘛教沿革』から『輿地志略』へとシフトしていく過程、様々な情報に接触しつつそれを取り込みながら、『世界に於ける仏教徒』に向かって、自身の考察を組み上げていく過程を裏付けていると言えるのである。

(1) 内田正雄『輿地史略』は、1870（明治3）年から1877（明治10）年にわたって出版された。チベット事情が収められている巻二は、大学南校から刊行されている。著者内田正雄は、1863（文久3）年から1866（慶應2）年にかけてヨーロッパに滞在し、その間地理に関する資料を収集した。「当時これが唯一日本人の手によって刊行された世界地理書」であり、「海外で見聞を重ねた著者のものとして十分に消化され、叙述も明確であって、外国事情を解明した当時の著作として高く評価」されている（以上「所収教科書解題」海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』第十五巻、1965年、628-629頁）。

(2) 明治仏教史編纂所「明治年間仏教関係新聞雑誌目録」（『仏教関係新聞雑誌目録』、明治仏教史編纂所、1934年）によれば、『教学論集』の創刊は1883（明治16）年10月、廃刊は1892（明治25）年3月となっている（7頁）。実際に、『教学論集』第37編（1887年1月5日）巻末広告に、「抑モ教学論集ノ創メテ発兌アル実ニ明治十六年十月ナリ」とある。

(3) 例えば『教学論集』第74編（1891年12月15日付）「月報」欄には、「神戸クロニクル」の記事が引用されており、その中に教学論集について、「*Kyogaku-ronsyu* (formerly independent, but now, we believe, supported by the Shinshu sect) instalments are published of an abridgment of Spencerian philosophy and of Professor Mox Muller's "Science of Religion."」という記述がある。

(4) 福田行誠については主に、中村元、笠原一男、金岡秀友監修・編集『近代仏教』（アジア仏教史日本編Ⅷ、佼成出版社、1972年）224-229頁を参照した。

(5) 島地黙雷については主に、上掲書238-242頁を参照した。

(6) 原坦山については主に、上掲書229-234頁を参照した。

(7) 大内青巒については主に、上掲書234-238頁を参照した。

(8) 井上円了については、上掲書242-247頁を参照した。

(9) 鳥尾得庵については、上掲書253-254頁を参照した。

(10) 注(2)においてすでに述べたように、本論文において、『教学論集』の発行年については、西田の記述に依拠しない。

(11) 例えば善連法彦の「錫蘭通信」（『教学論集』第58編、1888年10月5日）には、「日本ニテハサイアムやビルマト云へハ留学スルヲ咲笑シ罵ルカ如キ有様ニテ錫蘭ト云へハ羨ム様ニ候へ共決シテ然ラス（中略）企望ス仏教新聞記者妄見ヲ吐キテ青年僧侶ノ方向ヲ誤ラ令ルコトナカレ外航留学ヲ奨励スルノ人ハ必ス暹トビルマヲ云へ錫蘭ヲ第一ト云勿レ、国王自ラ仏教ヲ尊信シ国力ヲ尽シテ仏教ヲ紹隆スルノ国何レカニアル唯横濱ヲ去ル西ノ方三千三百里一ノ盤谷アルノミト答フベシ」（13頁）とある。ここからはス

リランカにいかに関心が集中していたかを見て取ることができる。

(12) 「印度留学僧」(『教学論集』第 65 編、1891 年 1 月 15 日、30 頁)によれば、この記事掲載当時、スリランカのコロンボに、「東京目白新長谷寺徒弟 釈興然 越前仏光寺派 善連法彦 肥後西本願寺派 東温謙 越前誠照寺派 小泉了諦 越前東本願寺派 朝倉了照 肥後西本願寺派 川上貞信 西本願寺派 徳澤知恵蔵」が滞在していたとされる。

(13) 本論では、現在入手可能なハズリット訳本のうち、1852 年出版時に最も近い出版年のものと考えられることから、*Travels in Tartary, Thibet, and China, during the Years 1844-5-6* (London, Office of the National Illustrated Library, [18-]) を使用した。これには出版年の記載がないが、1852 年版と推測される。その他、最も詳細な注釈が付せられた版とされている *Souvenirs of a Journey through Tartary, Tibet and China during the Years 1844, 1845 and 1846* (Peking, Lazarist Press, 1931) を適宜参照した。

(14) 笠原研寿は、1876 (明治 9) 年、南條とともに英国に留学したが、1882 (明治 15) 年病気のため帰国し、翌 1883 (明治 16) 年 7 月 16 日に没した。

(15) 以下その原文を引用する。「勤行果テシ後スボティスウード氏ハ別ニ尋ヌベキ疑問モナカリシガ同伴中ノ一人忽不審ノ廉ヲ挙ゲテ垂示ヲ乞ヘリ其次第左ノ如シ

問云誰カ天地万物ヲ造リシヤ○答無シ○問然ラバ君ハ何カニ万物ノ原始ニ付テ説ヲ与ヘラルヤ○答此ハ因縁所成ニシテ決シテ能造者ニ造ラレタル者ニアラズ○問男女ノ始テ此世ニ現ハレタルコトニ付テ君ノ所説ハ云何ナルヤ何レ此世界ニ於テ最初ノ夫婦アリテ爾來彼等ヨリ人類ハ相續シタルニアラザルハアラズ○答此ノ如キノ見ハ更ニアルコトナシ何トナレバ人類ハ無始以來展転セリ決シテ此世界ト共ニ始メテ生ジタル者ニ非ズ○問何カニ此世ヘ罪惡ハ入り来リシヤ○答貪瞋癡及其他ノ煩惱是ナリ○問惡魔或ハ輪力ノ惡鬼ガ人ヲ罪惡ニ導キシニ非ズヤ○答決シテ如此ノ説ナシ○問何カニ惡業ハ坐セラルヤ○答自業自得ナルノミ○問上帝ナル者アリテ或ル時ハ罪惡人ヲ罰シ或ル時ハ彼レノ為メニ罪判ヲ与ヘルコトナキヤ○答否ナ惡業ノ為ノ故ニ生死ノ流転更ニ長引テ此生更ニ後生ヲ受ケ惡因惡果ヲ結ブナリ但シ何カニ苦海ニ沈ミテモ此心更ニ清浄ニ復スルコト能ハズト云ニ非ズ○問然ルトキハ今此生ノ後直チニ禍福ニツキ結局ノ裁判ヲ受クベシトハ信ゼザル歟○答否、汝耶蘇徒ハ魂ハ罪惡汚辱ノ儘ニテモ清浄ナル神ノ前に趣ケバ即時ニ清浄ニセラルベキコトハ信ズ併シ如此理ハナキコトナリ試ミニ看ヨ肉ヲ煮タル鍋ニテモ漸ヲ以テスルニ非ザレバ洗ヒ清メ能ハザルニ非ズヤ○問然レドモ魂ガ此生ノ後ニ直ニ永ク福力禍力ニ定マリ再ビ他ニ移ラズト云説ハナキ歟○答惡業ノ報ニ付テ遠ク塩海霧中ニ獄所アリ彼所ニ趣クモノハ必ズ歸得ベカラズト云説アリ然レドモ聖賢ノ教ニ於テ更ニ此ニツイテノ説話ナシ元ヨリ我輩ハ多ク此ニ心ヲ留ムベキコトハ思ハズ何トナレバニハ惡業ニ付テ

思惟スルモ動モスレバ却テ心ヲ惡ニ引カルコトアラフ恐ルニハ惡業ニ付テ思惟センヨリ寧ロ涅槃^{ニルヴァーナ}ノ深味を味フノ切ナルニ如カザレバナリ○答涅槃^{ニルヴァーナ}トハ何ゾヤ○答涅槃^{ニルヴァーナ}トハ我々畢竟証悟シ得ベキ妙果ナリ此即チ生死ノ苦ヲ免レ煩惱ノ繫縛ヲ解脱セシスガタナリ且此語ハ涅槃^{ニルヴァーナ}即チ不動ノ義及ビ涅槃^{ニルヴァーナ}即チ動ノ義(タトヘバ風ノ如シ)此二字ヲ以テ成立タル語ニテ静止不動ノ相ナリ○問但シ君ノ教ハ波羅門教ヨリ劣レリト云ベシ彼教ハ畢竟獨一ノ神ヲ立テ人魂死後ニ此神ト一致スト云然ルニ仏教ハ畢竟無為寂滅ニ至ルヲ以テ行者ノ唯一ノ方向トスルニミ○爾時僧云然ル時ハ汝ハ不審シク思ハザルヤ苦難悲愁ノ此世ハ善行ノ大道ハ惡縁ノ荊棘ニ囲マレー事ヲ達ス^{ヴィニ}モ苦勞ノ後ニ非レバ得ラズ故ニ小善小行スラ為シ得ル易カラズ且ツ何カナル明德モ迷霧ノ為メニクラマサレ易シ而シテ此心惡縁ノ大敵ニ打勝チ次世直チニ所謂真神ト一致シ得ベシトハ亦難カラズヤ○日嗚呼和尚ヨ君ハ意味ヲ惡ク取ラレシヤウニ見ユ試ミニ君ノ教ト我教ト位置ヲ替ヘテ考ヘテ見タマハントフ請フ然ルトキハ君ノ道ノ謬ガ分ルベシ○僧云嗚呼耶蘇教徒ヨ汝亦自ラ知テ他ヲ顧ミザル人ナルベシ且ツ我今何時ニ一問ヲ与フベシ土耳其ハ大国ニ非ズヤ○日然リ○僧云彼人民ハ耶蘇教ヨリ後ニ起リタル奇ナル宗旨ヲ信用セリ○日然リ○僧云假令ハ一人ノ回々教来リ汝ノ教ノ「ビショップ」(僧正)ニ對シ回々教ト自身ノ教ト交換セヨト請フコトアランニ「ビショップ」ハ之ヲ許サバ汝ハ之ヲ云何ト思フヤ○日我ハ必ズ其「ビショップ」を狂セリ或ハ愚人ナリト見做スベシ」於是「カルマク」僧談ヲ止メテ復タ問フ所ナシト云ヘリ」(『笠原研寿手簡』『教学論集』第 10 編、1884 年 10 月 5 日、3-5 頁)。

(16) 発端は 1891 (明治 24) 年の、「不敬事件」と呼ばれる出来事である。同年 1 月 9 日に行われた教育勅語奉戴式において、第一高等中学の講師であった内村鑑三が敬礼を行わなかったことが、「不敬」とされ非難を浴びた、というものである。各地で同様の事件が発生したが、いわばその代表的なものとして知られているのが内村の事件である (前掲書、247-251 頁)。

(17) その他、『教学論集』第 75 編 (1892 年 1 月 15 日) 所載のマックス・ミュラー「宗教学入門」において、「天帝」という言葉について各言語を比較して考察した箇所に、「西藏語ノ履歴ヲ詳ニカニ知ル迄ハ之ヲ粗忽ニ採用スルコト能ハサルナリ」という記述がある (10 頁)。

(18) 例えば『教学論集』第 58 編 (1888 年 10 月 5 日) 所載の善連法彦の書簡では、神智学協会に触れ、「当協会の会員は日本仏教者の挙動と其論説を聞くを無上の楽しみとすることにて既に反省会雑誌の論説を転訳して当協会の雑誌に掲載し大に該会の名誉を博せし事実も有之候」との記述がある (11 頁)。

(19) 「印度留学僧」『教学論集』第 65 編、1891 年 1 月 15 日)によれば、この記事掲載当時、スリランカのコロomboに、「東京目白新長谷寺徒弟 釈興然 越前仏光寺派 善連法彦 肥後西本願寺派 東温謙 越前誠照寺派 小泉了諦 越前東本願寺派 朝倉了照 肥後西本願寺派 川上貞信 西本願寺派 徳澤知恵蔵」が滞在していたとされる (30 頁)。

(20) 小泉了諦の、スリランカ、トルコ、ヨーロッパでの見聞は、長文の報告にまとめられ、複数回掲載された。特にスリランカの旅行記においては、神智学協会関係者に受けたもてなしについて頻繁に言及している。例えば、「印度鏡新聞記者ナレンゾー氏を訪ふ氏は博識の聞へある人、神智協会々員たり予輩の訪ひしを深く喜び寢室など自ら案内し懇切に弟兄をして眠らしむ」(15 頁)、「神智会々員たるヂヤンツー氏等 (中略) 何れも親切を尽せり」(16 頁)、「ヅルガサンカラ氏の宅に着す氏は神智会々員にして性質温厚人に接する甚だ親切なり」(22 頁、以上小泉了諦「仏陀伽耶参拝紀行」『教学論集』第 72 編、1891 年 10 月 15 日)、「同車して靈智会々員銀氏の所住図書館内に入て磚堆居士及二三の会員に遇ふ」(13 頁)、「日已に西に傾きければ銀氏の家に帰りぬ会員諸氏懇篤待遇し予輩に満足を与ふ、始終先導者となりて奔走する勝獅居士も会員一統より推挙したるものなり (中略) 十二時過るまで会員諸氏に對し大乘の妙味を談じ壯快の交りを為せり」(15 頁、以上小泉了諦「印度楞伽島巡遊紀行」『教学論集』第 74 編、1891 年 12 月 15 日) 等という記述が見られる。

(21) 但し以下のように、仏教の流行を批判的に見る記事もある。小泉了諦は、「欧州紀行」『教学論集』第 76 編、1892 年 2 月 15 日)において、英国における仏教徒の數に言及し、「英人某氏の説に仏教徒六万五千人余ありと云ひしが予案ずるに仏教書籍を手にする者を総稱するの數ならん」とし、その現状を、「仏教の真味を嘗めて心底より楽しむには非ず其極意唯是輿論に好評を得たる仏教を面に被り世間の舞台に一演劇を演じ声価を博するの機関に為す者の如し」と述べている。彼は続けて、「其運動する所我仏教の為に遮すべきに非れ共十分の学びなきに牽強附会をもて種々の臆説を吐き日本仏教々々々々と言散らすには困りたものと眉を顰めざるを得ず」とも書くが、「一変二変して終に仏教国となるの時来るは十萬衆生の誓願あるを信ずる予輩に於て疑はざる所なり」とも記している (12 頁)。

(22) 「破邪顯正運動」とは、「邪教を破斥し正法を顯現する」ことを目指す動きであり、①仏教宗派間のものと、②キリスト教に対するもの、の 2 種がある。②について最も早いものは、1549 年のフランシスコ・ザビエル来日がきっかけとなったもので、ザビエルの仏教批判に対して起こり、金地院崇伝などがキリスト教に反駁する著作を書いた。次の契機は、1858 年の開国であり、プロテスタント宣教師の来日と、幕末の長崎大浦天主堂への大量参詣、数多くの「崩れ」事件などに、仏教僧侶たちが危機感を持ったことによる。これは幕末を経て明治初年まで続き、明治に入つて、小栗栖香頂『耶蘇攘斥論』等が書かれた他、東本願寺が排耶を目的に「護法場」を設けるなど、各宗で活発な動きがあった。明治中期になると、キリスト教の伝道が許可されたことに、国粋主義の抬頭が重なり、「不敬事件」とそれに続く井上哲次郎の『教育ト宗教ノ衝突』をめぐる論争が起こり、仏教側において排耶論と仏教護国論が非常に高まりを見せた (以上今泉淑夫編『日本仏教史辞典』吉川弘文館、1999 年、850 頁)。

(23) 無外書房版の「緒言」には、『教学論集』の目的について、「閱覽者ノ智見ヲ發達セシメ (中略) 究竟ノ樂地ヲ占得セシムル」(第 33 編、1886 年 9 月 5 日)と述べられており、「比較宗教学」という表現は全く使われていない。

(24) 以下その部分を引用する。「Introduction to the Science of Religion (by Max Müller) . (マクスム ユーラル氏) 宗教学入門一冊 The Hibbert Lectures (by several scholars) (諸宗教学士ノ) ヒッパルト講義 毎年一冊宛出版 (但千八百七十八年以後) 右二書ハ倫敦ロングマンズ、グリーン商社刊 Sacred Books of the East (by several oriental scholars) . (諸東洋学士訳出ノ) 東方聖書 既刊凡三十冊 右ハ英國牛津クラarend オプレス發行 右にて御承知被下度候也 一月二日 南條文雄 編者云く、此他に猶ほ比較宗教学の参考書となるべきものは既に教学論集等五拾七編二十頁に英語、独逸語、仏語の三ヶ国の語の書目數種を記載しあれば右のところをも參観せられ度候」(「比較宗教学入門の書目籍」『教学論集』第 65 編、1891 年 1 月 15 日、1 頁)。